佐野市新庁舎設計外業務委託公募型プロポーザル技術提案書（概要版）をお知らせします。

■庁舎づくりは、佐野市の歴史を物語ることから始めるべきだと思います。それらを通してまちづくりと積極的に関係付けた配置計画とします。本計画敷地のエリアは、江戸時代初期の山城禁止令により佐野氏の配下にあった唐沢山城が現在の「城山城址」に移築されたことにともない城下町として形成されました。唐沢山城址～城山城址～佐野駅～本庁舎～旧市街地と連続するこれらは、佐野市の歴史軸と言えます。私たちは、新市庁舎を歴史と関係付けられた、まちづくりの中心拠点施設として位置づけます。

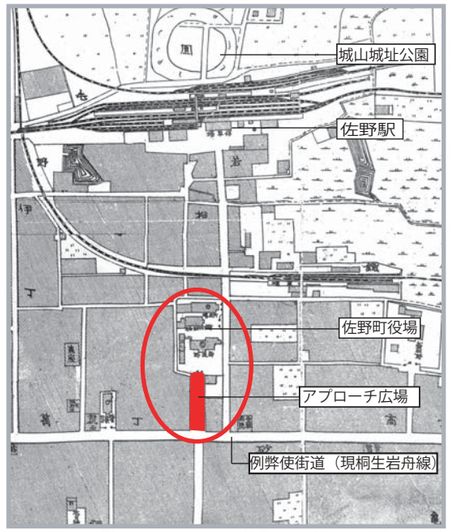

図1：明治４４年安蘇郡佐野町実測平面図

□明治の再生

明治 44 年の佐野町実測図によると、当時の役場と本計画敷地は、ほぼ同じ位置にあります。例弊使街道から当時の町役場に向かうアプローチ広場がシンボリックに配されています。私たちは、歴史の記憶をよみがえらせた、新たな「市民広場」を敷地内に再生させます。

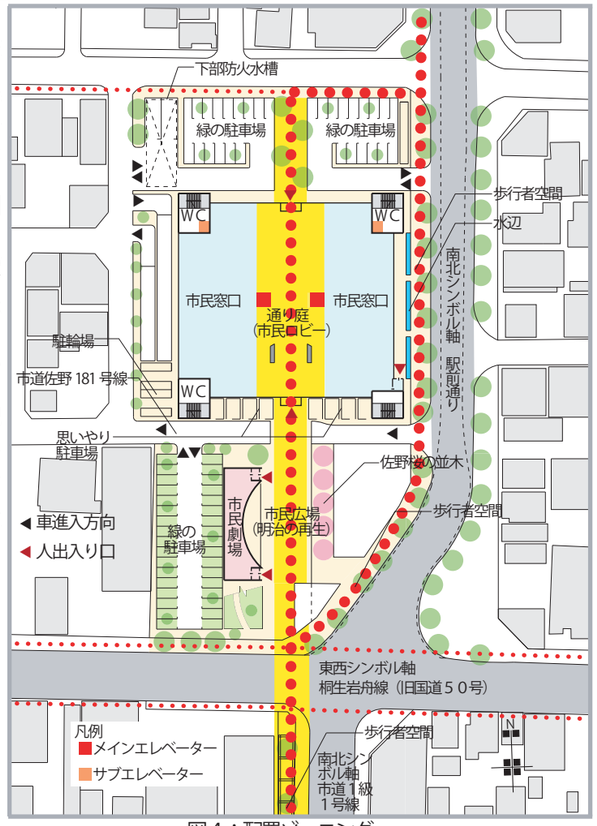

図4：配置ゾーニング

□まちなみに潤いのある配置計画

北側に緑の駐車場、南側に緑の駐車場、そして、まちの賑わいを演出する市民劇場・市民広場などを計画します。庁舎を囲む外部環境は全体が都市公園として計画されます。

□まちづくりと歩行者空間

佐野市のまちづくりシンボル軸として南北シンボル軸（駅前通りと市道１級１号線）と東西シンボル軸（旧国道５０号線）の歩行者空間の計画案が提案されています。南北シンボル軸で計画されている歩行者空間を本庁舎東側にも計画し、金屋仲町交差点～城山城址まで連続した歩行者空間を計画します。

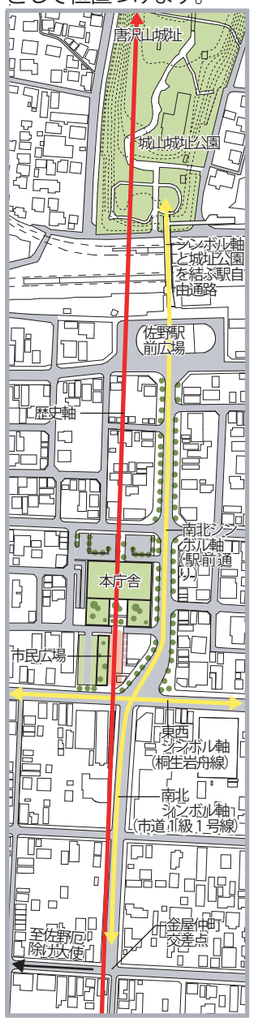

図2：歴史軸と庁舎

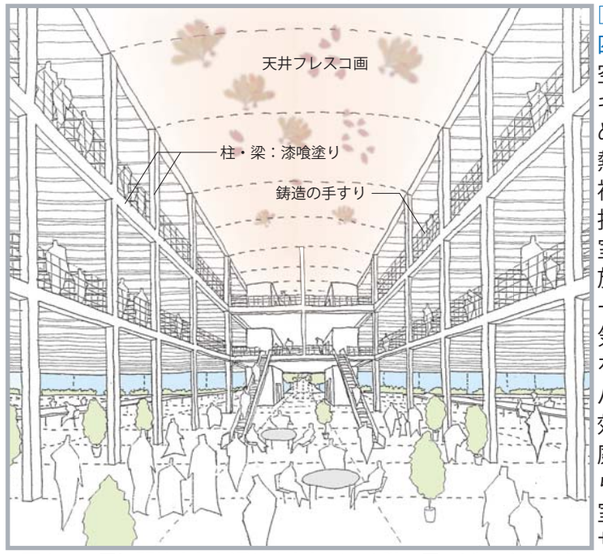

図３：市民に開放された通り庭としての１階市民ロビーイメージ

□市民広場と通り庭

明治時代の役場前広場を再生した市民広場は、庁舎１階のロビー（通り庭）と密接に関係付ける計画とします。ここでは、市民劇場と一体となり、休日や時間外にも利用できる野外ステージを計画し、様々な催しに対応した賑わいのある場として計画されます。

□中庭や吹抜けを利用して四季の変化を活用する庁舎

空調負荷を抑制しエネルギー使用量を削減するため、木製ルーバー、高断熱の外壁・屋根、高性能複層ガラス等を積極的に採用します。また、執務室と中庭に面する窓の開放、階段室を利用したソーラーチムニーによる換気など、佐野の気候特性を活かした夏期のナイトパージ（夜間の冷気の有効利用）を行います。中庭や吹抜けを通して、柔らかな光をロビーや執務室に採り込み、昼光センサーとの併用により電気使用量を抑えます。さらに、書庫やトイレは人感センサーにより無駄な電力消費を抑えます。

□高機能な自立型防災庁舎

災害時に拠点施設としての役割を果たすため、必要な設備や備蓄スペースを整備し、災害直後から自立対応が可能な庁舎計画とします。

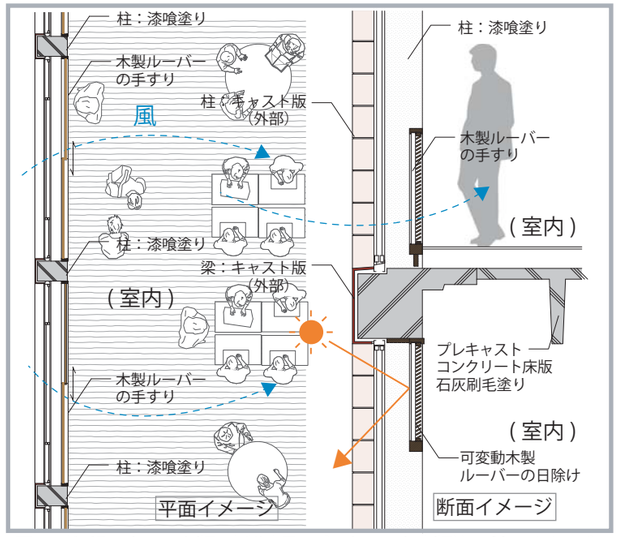

図5：柱･梁のキャスト版，木製建具，プレキャスト床版等の利用イメージ

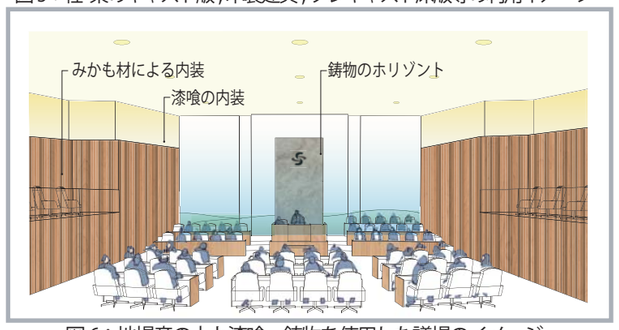

図6：地場産の木と漆喰・鋳物を使用した議場のイメージ

■現在の佐野市は、旧佐野市、田沼町、葛生町の合併によって新たな市としてスタートしました。それぞれの地域には、誇れる資源があります。私たちは、新市庁舎にそれぞれの地域の文化や資源を活用し、新たな佐野市にふさわしい庁舎と地域産業をアピールする計画とします。

□佐野地区の伝統文化　～鋳造～

佐野地区には、天明鋳物という優れた伝統工芸があります。庁舎には、鋳造の技術を駆使し、ファサードの柱、梁の外装にキャスト版（鋳造版）として活用します。また、室内ドアの取手、手摺などにも鋳造品を使用します。

□田沼地区の地域資源　～木と瓦～

田沼地区のみかも材と総称される良質な杉、桧を議会場や市民劇場をはじめ、本庁舎の建具や家具、床材、日除けルーバーなどに使用し、木質を活かした空間として活用します。また、田沼地区には屋根瓦の生産があります。庁舎に瓦の平板や、テラコッタタイルとして工夫し、外壁や歩道などに利用します。

□葛生地区の地域資源と文化
～石灰とフレスコ画～

葛生地区のセメント、生石灰、砕石などの建材は現在も全国に知られています。石灰のﾌﾚｽｺ画を庁舎の天井や壁面などに配し、庁舎を特徴付けたいと思います。

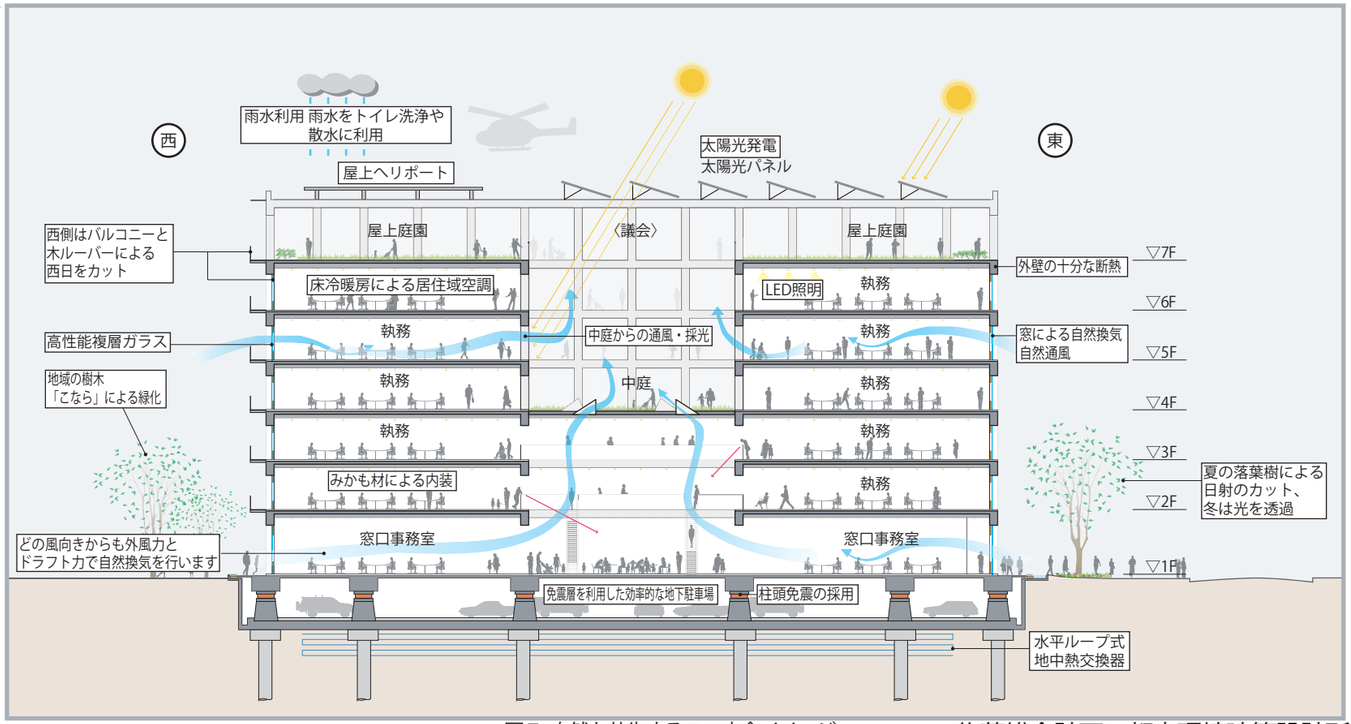

図7：自然と共生するエコ庁舎イメージ

※この技術提案書は、設計者を特定するためのものであり、新庁舎の概要については、今後基本設計の中で検討していきます。

佐藤総合計画・都市環境建築設計所
特定設計業務共同企業体
■新庁舎建設課☎（２０）３０５８